

が二つに分けたればとて二つに分けねばならぬ道理も無く、西洋なき種類のものなりとて文学にならぬ道理もあるまじ。」

「我国在来の文学をも新作の文学をも押しつぶしてこは西洋の文学に似よりもなしなどといひつつ其の言葉に軽蔑の意味を帯ばせて鼻うごめかす人のおろかさよ、其愚終に教ふべからざるなり。」(日本 明28)

と西欧排斥の氣息の見える文章を公にしているが、渡清後の病床で深く思索するところがあり、

「俳句以外の文学にも大体通曉せざるべからず、第一和歌、第二和文、第三小説、謡曲、演劇類、第四支那文学、第五欧米文学等なるべし。」(「俳諧大要」日本 明28)

と順序を立てて欧米文学を肯定するようになっていた。

その後、

「頓て年を経るに従ひ、美術文学の嗜好には邦上古今の區別消滅し只、美不美の二あるのみとはなれり。」(「我が俳句」)

と言っているように、文学の美、文学の中での美、不美を問題するところに焦点を集約することによって新聞「日本」の方針とも調和し、又、政治にも直接関与せず、あくまで文学の革新者、日本古来

の詩の革新者としての道を歩み、貴重なる成果を挙げたのである。

それは、佐幕藩出身者を辿らせた賢明な道であったともいえようし、同時に偉大な日本の自覚に立った成果であった言うことが出来るよう。

又、先に述べたような西欧文化への柔軟な対応が、ハーバート・スペンサーの進化論を適用させ、洋画のフォンタネージの写生を俳句に導入、活用させているのである。

申候。併し外国の物を用ふるは如何にも残念なれば日本固有の物を用ゐんと考ならば其の志には賛成致候へども亦も日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文学にても「漢語を用ゐたる物を排斥致し候はゞ日本文学は幾何か残り候べき。それでも瘦我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらばそは御勝手次第ながら其を以て他人を律するは無用の事に候。日本人が皆日本固有の語を用ふるに至らば日本は成り立つまじく日本文学者が皆日本固有の語を用ゐたらば日本文学は破滅至致候。」

は、固有の言葉にこだわりすぎること忠告の言葉を見せる。

然し、それでも何でも外国の善と思うところを取り入れたらよいのかという疑問に答えて、

「外国の文学思想を輸入すべしといふ事外国の文学を剽竊せよといふにあらず。剽竊にあらずして輸入する事歌人の腕次第なり。外国文学より得たる思想にても日本歌人の脳中に入りてそれが歌となりて再び出する時は其思想は日本化せられ居らざるべからず。既に日本化せられたる者は日本の思想なり。天眞の櫻花の人造の薔薇のといふ譬喩はかたはらいたし。櫻花をのみ無上にありがたがりて外の花の美を知らぬ人とは共に美術文学を語り難し。」(「人々に答ふ」六 日本 明31・4・2)

という、創作の本当のあり方を示したのである。そして、日本人と

しての矜持を

「英仏独の学者が為し得ずとするが如し。吾等敢て自ら矜(矜)に非ざれどもそれ程迄に西人を崇拜し居らず、それ程迄に日本人を軽蔑し居らず。誤解する莫れ吾等は子の如き西人崇拜にあらず。」

と表明するのである。

子規は西欧と日本の關係に於いて、このように新聞「日本」のゆき方と歩を合わせているが、かつてはそのように調和的でなかったことを、

「我の一時西洋の事物を尊崇したるや、其反動は終に西洋を輕侮し、日本の事物をのみ尊崇するに至り、其結果は美術文学の上にも及べり。」(「我が俳句」明29・8 世界之日本)

と回想し、その後も、「棒三昧」で、

「西洋がいかにも有り難きものにや、西洋を知らぬ我等には少し分りかねたりども、何でも彼でも西洋といへば有り難がる輩の気の知れぬ事よ。ある人は文学を「韻文」「散文」の二つに分ち某の文は韻文にもあらず散文にもあらず故に文学にあらずとて之を打ち捨てしことあり。今の西洋好の人の論は皆此類のみ。毛唐人

られたことから自信を持ち、俳句的短歌に自信を持つ。例えば、

み仏に供へあまりの柿十五

の俳句を、

み仏に供へし柿のあまりつらん吾にぞたびし十あまり五つ

と、三十一字に引伸ばす、又、俳句二つを結びつける、発想に万葉集を活かすといった方法などが取られたが、この場合でも、先覚として敬意を払った愚庵の和歌が、結局、童謡の色を濃く残したのに対し、直接政治を歌の世界とはしていない。

常に、文学としての枠を守り徹したのである。

この点、子規が日本の精神文化の高揚発揮を目指す新聞「日本」紙上に於いても、常に文学の枠を守ったこととして、注意されてよいであろう。

それはそれとして、子規は明治三十一年の二月十二日から三月四日にかけて「歌よみに与ふる書」を新聞「日本」に連載。和歌の革新に着手する。そして、新しい自派の和歌の主張として、

○ 感情を本にした和歌を作れ。

○ 万葉集を尊重せよ。

○ 用語を自在に。

○ 有りの儘を写生せよ。

この主張の間に、日本文学として西洋文学をどのように取り入れるか、日本として西欧文明をどのように取り入れるかという考え方を披歴している。

引用してみると、「六たび歌よみに与ふる書」で、

「従来の和歌を以て日本文学の基礎とし城壁と為さんとするは弓矢劍槍を以て戦はんとすると同じ事にて明治時代に行はるべき事にては無之候。今日軍艦を購ひ大砲を購ひ巨額の金を外国に出すも畢竟日本国を固むるに外ならず。されば僅少の金額にて購ひ得べき外国の文学思想杯は続々輸入して日本文学の城壁を固めたく存候。生は和歌に就きても旧思想を破壊して新思想を注文するの考にて随つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候。」(日本 明31・2・24)

ここでは、日本の軍備を西欧から購入して固めても何も恥ではない。文学に於いても同じことだというもので、新聞「日本」の創刊号で述べたものと同旨の柔軟な西欧文化との対応を語っている。

「七たび歌よみに与ふる書」では、

「外国語も用ゐよ外国に行はるゝ文学思想も取れよと申す事に就きて日本文学を破壊する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも将たサンスクリットの詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文学に相違無之候。唐制に摸して位階も定め服色も定め置き唐ぶりたる冠衣を著け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英国の軍艦を買ひ独国の大砲を買ひ、それで戦に勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可

「今や日清事有り王師十万深く異域に入る是れ国家安危の分る、所東洋漸く將たる多事ならんとす僕亦意を決し一枝の筆を挟み軍に従はんと欲す発程不日に在り訣別の情に堪へず」「征清の軍起りて天下震駭し旅順威海衛の戦捷は神州をして世界の最強国たらしめたり兵士克く勇に民庶克く順に以て此に国光を發揚す而して戦捷の及ぶ所徒に兵勢振ひ愛国心愈固きのみならず殖産富み工業興り学問進み美術新ならんとす吾人文学に志す者亦之に適應し之を發達するの準備なかるべけんや」(明治二十八年二月二十五日付 虚子、碧梧桐宛書簡)

と記している。

この「吾人文学に志す者」といつているのは、子規が文学者として、あくまで文学を通して日本の為に力を尽すという、基本的な態度を示した言葉として見逃せないところである。が、清国では「国破れて山河在り」という、子規が国家としての日本の自覚をより強くした体験の中に、「国破れて山河在り」という清国の亡国のの実状に触れたことを挙げてよいであろう。

「杖を携へて郭上に登り城内城外の景色など^{あまね}治く見渡すに杏花は全く散り尽くし今は桃李菜花など誰が為とは知らず盛を競へり。原頭の草色さへ漸く深うして亡国の地とも知らずやあるらん。国破れて山河在りとそゞろに口ずさまれて哀れなり。」(陣中日

記) 日本 明28・7・24日)

という哀れにはじまり、亡国の民の無智について、

「十三日、行先遙かに山を見る漸く近づくに幾多の邱陵^は兀げ並びて姿のけはしからぬさすがに大国の風あり。砲臺に昨日の戦を忍びつ、○○湾に碇を投ずれば乞食にも劣りたる支那のあやしき小舟を漕ぎつけて船を仰ぎ物を乞ふ。飯の残り蕙の切れ迄投げやる程の者は皆かい集めて嬉しげに笑ひたる亡国の恨は知らぬ様なり。」

とし、その無氣力に注目している。又、漢詩では、「金城」と題し、

旌旗十万捲天来

一戦国亡枯骨堆

犬吠空垣人不住

滿城風雨杏花開

とする世界では、亡国の地の哀れさを杏花の美しさで捉えている。

漢詩であるだけに、一層悲哀が伝わるが、背後に、子規の幼児期に、松山領を他藩に占領された亡国の思いが流れているのであろう。

渡清によってより強くなった日本の自覚は文学者として新時代に適應しようという言葉の通り、直接政治活動に結びつくのではなく、和歌の革新に向けられる。

実作については、明治三十年の十月、京都の天田愚庵から柿を賜

文化の範疇にある俳論、俳句の革新を押し進めてゆく。

俳句和歌を日本固有の文学として挙げつつ、

「外に対して誇らざるべからざる和歌俳句は互に相軽蔑するのみならず、和歌俳句其仲間にて相反するに至りては終に是れ国粹を發揮する所以にあらざるなり。」

「此和歌此俳句は実に我邦固有の純粹なる韻文として他邦に誇らざるべからざるものに非ずや」。(「文学漫言」和歌と俳句 日本 明27・7・28日)

と言ひ、和歌、俳句を外国に誇る文学とする決心をほのめかしている。

そして更に、天然を詠う文学―俳句・和歌が人事を扱わないから価値がないとする見解に対しては、

「東洋の韻文国は主として天然を咏じ西洋の散文国は主として人事を叙せり。」

「韻文とし言へば西洋のものも天然に傾く事多く韻文とし言へば我邦のものも人事に傾く事多きは其文體之を然らしむる者なり。」我邦の詩歌に至りては些の人事感情を雑へずして単に山水を叙し花鳥を詠する者尤多く其詩歌の作者が人間なるか神仙なるかを疑はしむる者さへ少なからず。」

として、天然詩こそ東洋の、とりわけ日本を特徴づける詩であることを述べ、

「何か故に人間は文学の上に必要なるか何が故に天然は文学たるの価値なきか。彼等口にして文学を称へて心に文学の何たるを知らず故に此讒語せんごを發するのみ。文学は直接に吾人が感覺到訴へて快樂を生ぜしむべき美術の一種なりとせば其快樂を起すべき天然が何故に文学たらざるか。況んや天然より起す所の快樂が必ずしも人事より起す者に比して少からざるをや。彼等は彼等の感情を以て標準とす故に然るのみ。他に天然に付きて快樂を感じる者あらば彼等は之を奈何せんと欲するか。彼等は固より何の理由も無く天然は面白からずと云ふならば此方にも亦何の理由も無く人事は面白からずと云ふ人あらん。」(「文学漫言」天然と人事 日本 明27・7・24日)

と、独自の詩論を展開し、天然詩も美術の一種、感情に直接訴える文学であるとし、暗に西洋にないから価値なしとする批評家たち、識者たちを非難するのである。

このあと、日本を自覚する大きな行動的な出来事としては、明治二十八年四月、日清戦争に従軍したことである。休戦後であったので、直接、戦闘を観ることはなかったものの、中国に直かに触れて帰国した。

出発に際しての決意は、弟子の虚子、碧梧桐宛の書簡で、

哲学道義の理は之を敬し其風俗慣習も或る點は之れを愛し特に理学、經濟、實業の事は最之を欣慕す然れども之れを日本に採用するには其泰西事物の名あるを以てせずして只日本の利益及幸福に資するの實あるを以てす故に『日本』は狹隘なる攘夷論の再興にあらず博愛の間に国民精神を回復發揚するものなり」

とする。即ち、西欧文化の善美は之を取り入れるとして、自由平等、哲学道義、風俗、習慣も、日本の利益になり、幸福に役立つものなら撰取してゆくといい、それらを活かして国民精神を發揚せよというのである。

この西欧文化に対する考え方は、同じ号の無記名の一文「日本といふ表題」にも見えている。

「吾人は西洋事物を只其西洋物たるを以て採用せず日本の利益幸福なるか故に之を採用する者なり西洋に於て善良なる事物も我國に移して適当ならざるものは棄て、之れを顧みざるなり。吾輩か本紙を發刊するの意も亦質に此にあり」

と「日本」の目的を明らかにし、

「今吾輩か非として論ずる所は此の極端なる西洋主義にあり其理由は他なし只此の西洋心酔を以て我國の利に非ずと信ずればなり。抑々今日に於て西洋諸國の我に優れる開花を占むることは何

人たりとも之を知らざる者なかるべし吾輩も亦權利自由の説を重じ此等諸國の法律を貴ぶ者なり吾輩は哲学道義の理を敬し西洋諸國の工技文芸を愛する者なり其經濟的實業的の事に感服する者なり風俗慣習の或るものに就きても吾輩は亦西洋を欣慕することなきに非ず。然れども此等重愛する事を我國に伝へて採用するに至りては大に其適否を考へざるべからず採用は實に主要の問題なり」

と、採用に當つての良識を説いている。

要するに、新聞「日本」の目指した亡失せる国民精神の回復と發揚は、日本古来のものを基礎に置いて、それを進展せしめるのであるが、その場合、西欧の文化全般は国粹を發揮するために取捨選択して活かしたらい。その善美は活かしたらいというものであり、精神世界の革新を目指したのである。

子規が日本新聞社に入社するのは明治二十五年の十二月であるが、「日本」の發刊された日には、大学予備門の学生として帝國憲法發布の祝賀行列に参加し、その帰路、第一号を購入している。

それは、日本新聞社社長の陸羯南と子規の叔父加藤恒忠とは親友であり、羯南と面識のあったことから関心を抱き買ひ求めた。

子規と新聞「日本」

入社時には、勿論、新聞社のゆき方に共鳴しており、日本の精神

之を輸入するのは泰西の文明に心酔するの故に非ず、只其文明が我国民の進歩に資するあるを採るなり。故に日本が泰西文明を採るに当りては、常に国民精神を以て陶冶し、之を日本的にせんことを力むべし」

と説くのである。

そして新聞「日本」発刊の辞では、

「新聞紙たるものは政權を争ふの機関にあらざれば則ち私利を射るの商品たり。機関を以て自ら任ずるものは党義に偏するの謗を免れ難く商品を以て自ら居るものは或は流俗を趁ふの嘲を招く今の世に当り新聞紙たるもの、位置亦た困難ならずや。然りと雖も自党の利益を謀るに偏して漫に異論を唱へ曲事を掩ひ以て自ら政党の機関なりと称するものは新聞紙たるの職分に欠く所なき歟。」

「自ら政党外に中立すと称するもの亦た新聞紙たる職分に欠く所なき歟。」

と説いて、新聞が政治、政權のための具となっていることを批判。「日本」が政党外に超然たるものであり、中立の立場をとるものであることを先ず明らかにしている。

又、世俗に媚びる商品でもないとして、

「我が『日本』は固より現今の政党に關係あるにあらず然れども亦た商品を以て自ら甘するものにもあらず」

と言ひ、一つの主義に基いて刊行するものであるとする。

欧米文化に無批判に追従する現実を批判、日本の国民精神を回復発揚することを目的とすることを説いている。羯南の言葉、

「近世の日本は其水嶺を失ひ自ら固有の事物を棄るの極殆と全國民を挙げて泰西に帰化せんとし日本と名づくる此島地は漸く將に輿地國の上にたゞ空名を懸くるのみならず」

「『日本』は自揣らす此様搖せる日本を救ひて安固なる日本と為さんとを期し先づ日本の一旦亡失せる『国民精神』を回復し且つ之を發揚せんとを以て自ら任ず」

「『日本』は外部に向て国民精神を發揚すると同時に内部に向てハ『國民團結』の鞏固を勉むへし」

は國民精神の發揚と國民の團結が、新聞の目指すところであつたのである。

それでは、欧米文化とどのように対したらよいか。それについては、

「『日本』は國民精神の回復發揚を自任すと雖も泰西文明の善美ハ之を知らざるにあらず其の權利自由及平等の説は之を重んじ其

官報局時代の部下であった、陸羯南が官を廃めるといので、新聞を経営させたのである。

そして、「東京電報」が新聞「日本」となる過程で乾坤社と谷千城、三浦梧樓の軍人や浅野長勲ながとといった旧大名との結びつきがあった。

この辺について、谷の日記には、明治二十一年十月十三日に、

「福富氏来る。新聞の事」、二十四年には、「福富氏来る。先月来苦心の事業義侠の力により基礎確立の吉報を得たり。」「弥生町の方も異議なき由の談あり。」（弥生町は長勲のこと）

二十八日には、

「六時頃より弥生町に行く。来会するもの杉浦、福富、古荘、千頭、陸、高橋諸氏及宮崎某、野村文夫氏等なり。」「新聞の名称は単に日本と冠する議あり。」

と見えている。

新聞「日本」創刊に協力した人々を整理してみると、先出の、

○谷千城、三浦梧樓の陸軍軍人。将官。

○浅野長勲。旧大名。

の他に、

○杉浦重剛、高橋健三、小村寿太郎、長谷川芳之助、千頭清臣、福富孝季、中村弥六。大学出身者で乾坤社同盟。

○宮崎道正、志賀重昂、今外三郎。札幌農学校出身者。

○三宅雪嶺を中心とした東京大学出身者。

○福本日南、国分青崖、羯南を通して司法省法学校関係。があり、これらの杉浦が繋ぎ合わせる役を果していた。

創刊に当っての羯南の決意は、「東京電報」の廃刊の辞「東京電報逝き日本生る」に先ず見えている。引用してみると、日本の社会の現状、

「国開国以来の有様は泰西文明の外観に眩暈し、泰西各国民が今日を致したる所以を究めず、只管之に心酔するの極、遂に泰西崇拜の風潮を生じたりき。此風潮は実に国民独立の基礎たる国民性格を破り、一国の文明をして虚飾たらしむるもの」

であるので、

「『国民精神』を發揮し、一国の独立の基礎を立てることを新聞『日本』の使命とする」

ものである。然し、西洋の文明はむやみにこれを排けるものではない、

「今日泰西先進国の文明は、実に後進の国民に益する所多し、故に泰西文明の善美は力めて之を輸入せんことを期す。然れども

本人の任務」の中で、

「美を極むるには、美の觀念より生じ来る許多の趣向を調合教育し、之を淘汰し、之れを助長し、以て其真粹を發揮せんことを望む。」蓋し我が日本の国たる、氣候温和、風物清純、三笠山ふりさけ見れば月小に天高く、淡路島通ふ千鳥朗かにして波に応ふ。「要するに日本の国や、山水の美に於て更に欠く所あらざるなり。」

「要するに我國の美術や固より偉大宏壮なるものありと雖も、概するに手軽くさらさらとして輕妙に渉るの風ありとす。」

「我が美術の美を宇内に發揚せんは、果して如何の方策を取るべきか。」

「足を世界の競争場裡に投じ、各国の芸術と轡を駢べて相競はんと欲せば、及ぶ限りは自国の特質を現はして之に當るを得策とす。就令其特質にして口を極めて称揚すべきものにあらずとも、非難を容るゝの余地なからんには、益々之を宇内に撤布せよ、これ亦人類の美を極むるに於て一箇の手段なりと謂ふべきなり。」

（『真善美日本人』「日本人の任務」三 明24・3）

と主張、美、日本の風景美、芸術の發達を説くのである。

新聞「日本」は高橋健三が官報局時代の部下である陸羯南を杉浦が羯南を福富孝季、千頭清臣に紹介したことから發案された。福富、千頭は開成学校出身の友人であり、乾坤社の同志である。

羯南と福富は、杉浦に頼まれ、羯南經營の「東京電報」に洋行中の福富の文章を掲載してやったことがあり、その縁から帰国後、親しくなった。その辺を羯南は、

「明治二十一年の春、吾れ東京電報なる新聞紙を創む。此の時に方りて未だ臨淵氏（福富）を識らざるなり。然れども天台道士（杉浦）屢々之を吾れに語ること詳なり。其の倫敦より寄す所のポジチヴ#スト会の日本に対する意見は、道士実之を吾に与へて紙上に掲げしむ。是に於てか吾れ斯の人、及び千頭氏の名を知り、且つ窃に之を慕ふ。」

「新聞紙の業は易からず、先輩及び知友の憐助甚だ多しと雖ども、吾れ名甚だ微にして、才甚だ庸なるが故に、業少しく挙げらず、障害亦た之に加はる。未だ一年を経ざるに、吾れ力の能く支ふべからざるを謂ひ、將に業を廢して以て罪を先輩知友に謝せん」とす。」

「臨淵氏方さに海外より帰る。天台道士吾れの為に此の事を語り、且つ吾れを介して之に面せしむ。氏一面旧の如く、吾れの業に助言すること頗る懇切なり。」（『臨淵言行録序記』）

羯南の言う「東京電報」というのは、「東京商業電報」という相場新聞を買い取り經營していたもので、乾坤社同盟の發行である。

明治二十一年四月九日發刊、明治二十二年二月九日に廃刊した。

羯南がこの新聞に関係したのは、乾坤社同盟の一人、高橋健三が

明治二十年四月

同盟者

- 杉浦重剛 印
- 巖谷立太郎 印
- 平賀義美 印
- 宮崎道正 印
- 谷田都梅吉 印
- 長谷川芳之助 印
- 小村壽太郎 印
- 高橋健二 印
- 谷口直貞 印
- 中村彌六 印
- 河上謹一 印
- 伊藤新六郎 印
- 西村貞 印
- 千頭清臣 印
- 福富孝季 印
- 国府幸新作 印
- 手島精一 印
- 高橋茂 印

三郎、松下丈吉、宮崎道正の十氏と共に、雑誌「日本人」を発行した。

雑誌を出すことになったのは、井上円了が本屋をやっており、こへ集まった三宅雄二郎（雪嶺）、辰巳小次郎、棚橋一郎、加藤秀一、杉江輔人の六人が集まって雑誌を出すことを計画、杉浦に相談したところ、別に杉浦に雑誌刊行を企てているグループ、志賀重昂、菊池熊太郎、今外三郎などの農学士、それと宮崎道正、松下丈吉があるということ、結局、両方合同してやることになったのである。社名を改教社、主筆を志賀重昂、誌名を「日本人」とし、熊田印刷所で印刷した。

杉浦は日本主義者であったが、重昂は問題意識の中に美術を含めて、

『日本人』は若干の目的と幾多の希望とを懐抱すと、借問す爾が所謂目的と希望とは何許にか在る。曰く、当代ノ日本ハ創業ノ日本ナリ、然レバ其経営スル処、錯綜湊合、一ニシテ足ラズト雖モ今や眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題ハ、蓋シ日本人ノ意匠ト日本国土ニ存在スル万般ノ困外物トニ順適恰好スル宗教、徳教、教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ撰択シ以テ日本人民ガ現在未来ノ嚮背ヲ裁断スルニ在ル哉、（『日本人』の上途を餞す）日本人
明21・4・3日

そして、明治二十一年の四月に、杉浦は、島地黙雷、井上圓了、

三宅雄二郎、棚橋一郎、辰巳小次郎、志賀重昂、菊池熊太郎、今外

と言っている。雪嶺は政教社から出版した『真善美日本人』の「日

文科大学に入学するのは明治二十二年九月で、大学での専攻は最初哲学科に入り、後に国文科に転じている。

そして、創作としては、小学校時代から始めていた漢詩を続けると共に、明治十八年から和歌、明治十九年から俳句を作りはじめ、明治二十四年の暮には小説「月の都」の筆をとっている。「月の都」は子規の熱意にもかかわらず、結局、文壇へ出ることが出来ず、改めて、「花鳥風月の詩人」即ち俳句、短歌に心を注ぐ決意を抱く。明治二十五年の一月のことで、日本の文学をする決心の中で先ず俳句の革新に着手するのである。

既に肺結核で咯血の病歴のある子規は、この年の十二月には大学を退き日本新聞社に入社する。

「日本人」・新聞「日本」

「日本人の記者は新聞「日本」の発刊を祝賀して、

「『日本』ハ大日本帝国憲法発布の日を以て出てたり、『日本』の主義は我日本国民の精神を發揚するにあり、是れ余輩の嘗て執るところの主義と其帰を一にするものなり、余輩ハ我か国風民俗の頹敗して、滔々欧米に陥溺し欧米に摸倣し、殆んと其の本領を失ハンとするの秋に際し、是れ等日本主義の日刊新聞の創起志たるハ、余輩のために頗ぶる強大なる勢援を得たるものなりと云ふべし、余輩の機関なる『日本人』雑誌と、貴重すべき『日本』な

る日刊新聞とハ、正さに是れ主義の兄弟たり、同主義の親友たり、是れより相協力し、相共に進退運動して、以て我国大勢の狂奔を正路に反へし、我国固有の本領を全ふせんことを期せんとす、(『日本人』二十二号)

と言ひ、「日本人」と「日本」が主義を同じくするものであり、親しい位置にあることを述べている。

「日本人」は雑誌で、この雑誌刊行のきっかけとなったのは、明治十七年六月頃の杉浦重剛と小村寿太郎との出会いである。

小村は洋行から帰って、「どうもこう政党屋が出来ては仕方がない。何か中立の確としたものがなければならぬ。」という感想を抱いており、新聞社を創めようとの考えを抱いていた。杉浦は、「こゝう欧米の直訳ばかりでは困る」という見解を抱いていたので、明治十九年の九、十月頃に組合を作った。

それが熊田活版所で、この折の同志を乾坤社と名付け、連判帳も作った。その主旨と同盟社は次の通りである。

「連判帳」

吾々有志共同事を執るの一要件として印刷機械を供給し、専ら印刷事業を経営し、且此事業を根基として往々一の新報紙を發行し、吾々有志立世の機関と為すの目的を以て、左の規約方法を定む。

「以上規約方法に従ひ、吾々同志左に連署捺印し、其確實を保する者也。

書記官 奏任
書記 判任

とするのである。そこには、国家須要の人物―国家の目的に叶う人物の要請が明示され、教える側の身分も、国に於いて保証されるものとなったのである。

大学、大学予備門の成り立ちを、年次を追って記してみると、

○慶応四年六月 旧幕府の昌平黌を復興して昌平学校を設置。(明治二年開校)

○明治二年一月 旧幕府の開成所を復興。

○明治二年六月 昌平校を大学校とする。

○明治二年十二月 大学校を大学。開成学校を大学南校。医学校を大学東校と改称。

○明治四年七月 大学南校、大学東校、文部省直轄となる。

○明治五年八月 学制頒布。全国八大学区に分ける。

○大学

第三十八章 大学ハ高尚ノ諸学ヲ教ル専門科ノ学校ナリ其学科大

略左ノ如シ

理学 化学 法学

医学 数学

○明治七年十一月 東京外国語学校開設。

○明治十年四月十二日 東京開成学校、東京医学校を合併し、東京大学を置く。理・法・文・医の四学部。

文学部は、史学・哲学・政治学科と和漢文学科の二学科。

医の四学部。四月 東京英学校を東京大学予備門と改称。法・理・文の学部の子科で大学の付属とした。

○明治十二年九月「教育令」

第五条 大学校ハ法理学医学文学等ノ専門諸科ヲ授クル所トス

○明治十三年八月 東京大学、法・理・文三学部に「学士研究科」を設置。(大学院の前身)。

○明治十六年一月 東京大学予備門に英語専修科が設けられ、地方の中学卒業者を収容。大学への進学が容易になる。

○明治十八年八月十四日 東京大学予備門、東京大学から文部省直轄となり独立。

○明治十九年三月二日 東京大学を帝国大学と改称。

○明治十九年四月二十九日 東京大学予備門を第一高等中学校に改組。

この年に、先出の三月一日の「帝国大学令」が出され、大学院と法・文・理・工・医の五つの分科大学で帝国大学が構成され、官の大学としての体裁を整えるのである。

子規が東京大学予備門に入学するのは明治十七年九月、帝国大学

示されている。

「多分の智識を養成せんとするは果して何れか勝れるや私門の如きは官費生になりて壓制教師に黙従するを能せんや況んや司法省の学校の新募も覚束なきに於てをや独立独行は大丈夫の常に為すべき所なり我仮令貧生なり共壓制教師に服従せんよりは寧ろ自由の空気を東京専門学校に吸はんと欲するなり尊叔教を賜はつて曰はく専門校の如きは田舎の何言人か判事補の予備門なりと勉強次第上達する者ならば私は此校に入り十分に孜々勉強せんと相望申候」

この文面によると、子規が最初希望したのは、自由の空気があるということである。東京専門学校であつたのに対し、恒忠は官立の学校、自分が学んだことのある司法省法学校あたりをすすめた。推察出来る。もっとも、この学校は毎年生徒の募集せず、この時期には募集を停止していたので、

「仰の如く専門学校等を卑しむ官費学校は（壓制はこらえても）新募覚束なくとすれば何処に入らんか入るべき処なきなり」

という言葉になつたと思われる。そして、子規自身、「勉強次第上達する」決意であくまで東京専門への進学を希望している。

結果から見て、大学予備門、官立に進むのであるが、このコース

は、お上の作った官の学校として、藩長の政治力とは別なその意味では良識の「場」であつた。

（このゆき方の背後に、大木喬任の努力があつた。）

明治政府が作った、お上の学校としての大学、大学予備門は新しい時代の人材を養成するために、維新直後からはじめられ、版籍奉還、廢藩置県、西南戦役といった政治的蕩揺期にも着々と進められ、明治十九年三月の「帝国大学令」（明治十九年三月二日 勅令第三号）で、

第一条 帝国大学ハ国家の須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス

第二条 帝国大学ハ大学院及分科大学ヲ以テ構成ス大学院ハ學術技芸ノ蘊奥ヲ攷究シ分科大学ハ學術技芸ノ理論及応用ヲ教授スル所トス

第四条 分科大学ノ卒業生若クハ之大同等ノ学力ヲ有スル者ニシテ大学院ニ入り學術技芸ノ蘊奥ヲ攷究シ定規ノ試験ヲ経タル者ニハ学位ヲ授与ス

とし、教師の身分も

第五条 帝国大学職員ヲ置ク左ノ如シ

総長 勅任

評議官

子規と日本

松井利彦

子規の進路

幕末の松山藩は、公武合体派で結果的には賊徒の汚名を受けた。会津、桑名と同じく徳川家への忠誠心と、孝明天皇に対しての忠誠心を信じて行動したからである。

これに対し、薩長側は倒幕を旗じるしとし、新帝明治天皇を玉として行動し、勤王であるとし、政権を握った。

佐幕派側に立った諸藩、勿論、松山藩も例外ではなく、明治時代を迎えて苦難の道を歩まざるを得なかった。

松山出身の子規は、かつての松山藩士たちが、他藩出身の知事たちに頭を下げ、生活も困窮してゆくのを目のあたりにした筈である。

このことに関しては、子規は書き残していないが、弟子の虚子にはその悲惨な状態を幾つか書き残している。

「松山人として何かを為す」という決意は、やがて政治に関心を持

たせる。自由民権への傾斜は当然のことである。そして、

「十六七歳ノ余ノ希望ハ太政大臣トナルニアリキ」〔仰臥漫録〕
日本 明34・10・19日

という壮大な夢も持つようになる。

しかし、やがて現実には佐幕藩関係者には政治的成功は望めないことに気付く。

士族としての誇りと、武家庭内にあつた学問的な雰囲気を活かす、唯一の、そして武士階級の陥っている一般的な貧しさから脱出する方法は、新制度による学制の中で、学問を身につけることであつた。

子規は、はじめ東京専門学校を希望したが、叔父、加藤恒忠のすすめに従って大学予備門、第一高等中学、帝国大学文科大学という道を選ぶ。明治十五年二月十三日付の恒忠宛書簡にこの辺の消息が